

乳牛がいるが、そのうち球磨酪農協同組合所属の農家が持っている乳用牛は、約二、五〇〇頭で、農家一戸当り三・八頭の飼養規模である。

しかし、これ以上の規模拡大を行なうためには、どうしても優秀な草資源の確保と乳牛育成事業の協同化が必要であり、そのため、今度二、〇〇〇万円を投じて、三〇〇の草地改良と育成施設の整備を行なうことになったのである。

この事業によって、酪農協所属農家の乳用牛は、将来五、〇〇〇頭に倍増することができ、飼養規模も一戸平均六頭以上に拡大することが期待されているのである。

次に林業については、未開発の広大な山地に林道を通し、林種転換による拡大造林を推進し、林業経営の拡大と機械の導入による省力化、近代化を推進していくのが、もっとも基本的な施策である。

球磨山地は気温と降雨にめぐまれ、山地の土壌も肥沃であるので、林木の生長はきわめて良好であるが、未開発の天然林が多く、ブナ、ナラ、カシ、シイなどの広葉樹林および針広混交林が六万六、八〇〇畝もあり、森林面積の五三〇を占めている。

スギ、ヒノキ、マツなどの植林された針葉樹林は、約四万九、〇〇〇畝で、森林面積の三九〇を占めているが、戦後に造林した幼令樹が多く、林木蓄積量の大部分は、天然の広葉樹である。

したがって、これらの天然林を針葉樹の人工林に林種転換していくために、未開発の山地に、大規模な林道の開設が求められており、その主なものは、奥地産業開発道路縦木五木線から東側の山を開発する基幹林道白蔵線、西側椎葉の奥を開発する一号林道平沢津線、そのほか一号林道槻木線などである。

また、四十年から三年計画で実施中の球磨村林業構造改善事業も、事業費の七二〇を林道の整備にあて、枝線林道の整備を行なうとともに、下刈機、植穴機、動力散粉機、トラック、索道などの機械を導入して、生産性の向上をはかっている。

林業構造改善事業は、そのほか四十一年度に水上村、上村が地域指定を受け、それぞれ四十二年度から実施する予定である。

商工観光の振興

球磨地区の開発を考えていく上で、農林業の近代化と並んで基本となるのは、交通体系の整備である。

まずまず広域化し、成長を続ける国民経済に即応して、農林業の市場条件を改善し、商工、観光の発展をはかるためには、道路をはじめとする交通条件の整備が、今後ますます重要な課題となってくる。国道熊本宮崎線の改良舗装は、いわばその動脈が一本通されたのであり、これと結ぶ国道人吉都城線の改良、主要地

方道人吉日向線の国道編入、人吉宮原線、奥地産業開発道路、その他、域内道路網の整備を急ぐ必要がある。

最近、国民所得の増大にともなって、観光旅行が大衆化し、バスや乗用車を利用した広域観光が急速に普及しているが、従来、球磨川沿岸道路が悪かったこともあって、球磨のバス観光はいちじるしく立ち遅れていた。

すなわち、四十年の観光利用客のうち、県平均のバス利用率が六一％であるのに対して、人吉球磨川のバス利用率は二一％に過ぎず、大衆観光旅行の主流であるバス観光の少ないことが、球磨観光の発展をさまたげる要因の一つになっていた。

国道熊本宮崎線の改良は、恐らくこうした隘路を、大きく打開することになると思われる。また、天草五橋の完成によって、熊本・天草方面と南九州を結ぶバス観光ルートの形成が強く要望されており、球磨地区はその中継地として、広域観光ルートの中に組み込まれる形勢にある。

球磨観光は、現在、大きな転換期にさしかかっており、駐車場など受入態勢の整備を急ぐ必要がある。

次に、球磨の商工業は、従来、農林業の発展と密接に関連しながら、地場の資源を利用する製材業、球磨焼酎など食料品、温泉地としての旅館業などサービス、小売業などが主であったが、最近、

球磨南部地域とは球磨川上流の左岸南部地域に広がる約三六〇〇畝の水田と畑地帯をいう。

この地区の水田は、約二五〇〜三〇〇年前に開きされたままの幸野溝、及び百太郎溝の二つの用水路でかんがいされており、土地基盤も両用水路と同時代に造成されたままの、極めて低位生産の構造をしている。そのため、この地域の農業経営は、今日まで旧態依然の労力過投による零細な営農資本、技術、及び規模に終始している状況である。

一方、農業は、戦後の急速な社会経済の発展により、一般経済との間に著しい所得格差を生じ、高度の土地改良事業を必要とするに至っている。本地域もこの例にもれず、この対策として出発したのが県営球磨南部地区土地改良事業であり、さらにこれを母胎として、農業の機械化、近代化を図り、農業生産性の向上を期するのが県営中球磨地区圃場整備事業なのである。

かんがい用水も

ふんだんに

―県営球磨南部地区土地改良事業―
幸野溝及び百太郎溝の両用水路は、水田約二、六〇〇畝をかんがいしてきたが、前述のように、開きく以来約二五〇〜三〇〇年余の長年月を経ているため、

繊維関係企業の進出状況

進出企業名	所在地	操業開始	製品名	敷地面積	投下資本	従業員	本社・親会社
ヤングニット(株)	免田町川原田	40. 5.28	セーター等ニット	m ² 9,240	百万円 21	73	大阪府堺市
西村繊維産業熊本工場(株)	多良木町多良	40.11. 1	製糸(ナイロンウーリー)	7,425	49	45	大阪府東区
岡崎繊維(株)	錦町一武	40.11.18	織布(56朱子)	50,338	44	43	大阪府貝塚市
中野繊維(株)	錦町木上東	41. 8. 1	織布(綿スフ)	9,900	24	42	〃
熊本繊維(株)	岡原村	41. 8. 1	〃(綿スフ合織)	9,900	70	40	大阪府泉佐野市
橋織物綿工業所(株)	錦町西	41. 8	織布	23,100	45	40	大阪府熊取町
谷宗織維(株)	相良村深水	41.10	〃	9,900	31	50	大阪府和泉市
未定	水上村岩野	42.10(予定)	〃	5,280	未定	40	大阪府南海町

注) 県工鑑課調べ

非常に目立つ動きとして、大阪方面から繊維関係の中規模工場が数社進出し、労働力立地型の企業分散として、世間の注目を集めた。

三十九年には、低開発地域工業開発地区の指定も受け、現在、七社が操業中、一社が進出予定である。一般道路の整備や、現在建設促進中の九州縦貫高速自動車道、湯前―杉安間国鉄新線の建設など、交通施設の整備によって、球磨地区の経済は、今後ますます国民経済との結びつきを強め、開放的に(次頁下段へ)

(前頁より) になっていくと思われるので、農林業の近代化と共に商工業の集積の増大と近代化をすすめていくことは、球磨地区の産業構造を、厚みのある安定したものに育てていく上で、ぜひとも必要な施策である。

生活環境と防災

昭和四十年の国勢調査によると、球磨地区の人口は、一三万七、〇〇〇人、全県人口の七・八％を占め、地区平均の人口密度は、一平方町当たり八九人と、県平均の三分の一程度である。特に五木、水上、山江、球磨の四村は、五〇人以下の人口密度であり、県下でもっとも人口の稀薄な地域に属している。

さらに人口の減少率も大きく、対三十五年の人口増加率は、地区平均でマイナスイ一・一％、県平均の倍以上である。特に前記の四村のほか、相良、錦、湯前の人口減少率が大きく、このように人口密度の稀薄な地区と、人口急減地区が重なっていることは、山村における経済力の培養と生活環境条件の維持、向上について、大きな問題を生ずる恐れがある。

こうした事態に対処するため、昭和四十年に山村振興法が制定され、球磨地区では、球磨村が四十一年に振興山村の地域指定を受け、四十二年度から四年間事業の実施を行なう予定である。

山村の問題は、今後、過疎地域対策として一般化すると思われる(次頁下段へ)

球磨南部の土地改良

潤う球磨南部

